

府中から川向うを眺めると、多摩丘陵が広がる。平坦に見える山並みの中に、どんな学びのスポットがあるのだろう。市境を越えての散策取材。今回は南のお隣・稲城市を巡ってみた。



《稲城市散策》 緑樹と薫風の中で、今日は京王線稲城駅より常楽寺-妙見寺-城山公園-大麻止乃豆乃天神社-大丸用水をまわり、南多摩駅を終点とした取材散策です。

お昼 12 時に集合した仲間達と共に、それぞれの好みのお弁当を抱え、訪問先のお寺にお庭拝借の許可を頂き昼食です。季節を謳歌し咲き誇る色とりどりのツツジの花、日に日に成長した小鳥の声が時折り空に響き、一同笑顔を交えます。

さあ、出発。稲城市は地区により平均斜度が 2.7%～6.5%の高低差がありますが、脚は無理なくリズムに乗って進みます。平安時代末期に建立された常楽寺、そして 8 月に「蛇より祭」の催しが行われるという妙見寺、神仏習合の珍しいお寺です。バスに乗って次は城山公園。ここは都会の騒めきなど知らぬ気に、濃緑と若葉が深まる山肌もあり静謐さを保っています。大自然の中で、黄花カタクリがうつむき加減に一握りの花を咲かせていました。可憐で直向きに生きる草花に別れを告げて、ゴールへと向かいます。(柴田洋子)

《城山公園のカタクリ》 稲城市立中央図書館の裏手の坂道を上っていくと、左右に樹木が生い茂り静寂な風が流れている広場に出る。大通りからほんの数歩を入った地点とは思えない静かさと、付近にあふれる香りと涼しさが心地良い。広場の左手には頂上に向かう細い山道があり、山道に沿う斜面にカタクリの群生地がある。カタクリは早春の山を彩る赤紫の可憐な花がひっそりと咲いているイメージで、花言葉は「初恋」「寂しさに耐える」だ。下向きに咲くその姿は、初恋の少女が恥じらいで気持ちを素直に言い出せないような切ない姿を思わせる。ここには珍しい黄色の花も咲いている。



カタクリの花は種をまいてから開花するまでに 7 年以上もかかるというのに、花の期間はおよそ数日という儚い花だ。非常に敏感な植物で、自然環境が変わると姿を消してしまうこともあるという。この花は地元の方が植えて大事に栽培しているらしいのだが、知る人ぞ知る隠れた名所である。(小林清次郎)

《静寂の寺・常楽寺》 隣接市の取材で稲城市を散策した。最初に稲城を知った昭和の 40 年代の半ばは南多摩郡稲城町だったが、50 年余り経た今日、町は稲城市となり商業施設や住宅環境も著しく変化している。



今回、最初に訪れたのが、印象深い天台宗の寺の「常楽寺」である。稲城市の市街地、京王稲城駅からほど近くでこんな所があったのかと思わせる程の静寂と落ち着きをもつ寺である。比叡山で修行した僧侶が再興したと言われ、都指定文化財の阿弥陀三尊像は市内で最古の仏像である。

その他境内の至る所に立像、坐像がある。ご好意で本堂を開けて貰い観音菩薩、阿弥陀如来、延命地藏、閻魔坐像等を拝ませて貰った。外に出て金色の千手観音をしぼし眺める。夏には大賀ハスの鑑賞も楽しめるそうで、今回とは違う風景を眺めてみたい。(渡邊繁雄)

《妙見寺》 京王線稲城駅から散策が始まった。稲城市は、府中市と隣接し色々に関わりがあるのに多摩川の対岸ゆえ歩くことがなかったので、新鮮な気持ちがある。

妙見寺は今回訪れた 2 箇所目のお寺。同じ名の神社と寺院が隣同士にある。寺の山門の左手前に鳥居があり、まっすぐに伸びた階段を登るとその先にも階段が続く。そこをさらに登るとやっと「妙見尊」の社が現れた。妙見寺の方に伺うと昔はこういう形はどこにでも見られたという。ご住職が神社の神職も兼ねておられるとの事。ひっそりとした境内は小山の上にある階段が長く感じられた。静かに建つお社は江戸時代のもので説明がありどっしりと鎮座している。夏には萱で作った 100 メートル位の大蛇を使ったお祭りが開かれるという。鳥居の前



に柱がありカヤの長い綱が渡されていた。これが祭りに使われたものだろうか。本殿の前に立つと賑やかなお祭りの光景が見えるような気がした。(辻 麻美)

《大麻止乃豆乃天神社 (おおまとのつのでんじんしゃ)》

行程の後半、城山公園の向かいの小高い天神山に天神社とお寺があるというので立ち寄ってみた

まず驚いたのは、大麻止乃豆乃天神社という白いのぼり旗が参道石段の左右に沢山はためいていること。



地域の人々が奉納したもので、今も天神様がいかに崇敬を集めているかがよくわかる。神社の名前に大変興味を惹かれたので調べてみた。平安時代の延喜式

にも載る古社、祭神は櫛真知命 (くしまちのみこと) といい、太古の太占 (ふとまに/占い) を司る神とされる。自然現象を司る天津神 (あまつかみ) である。

参道入り口には神社の別当寺、臨済宗の大悲山園照寺があり、墓苑を含む広い敷地を占めていた。典型的な江戸時代の神仏習合の世界が広がり、永い日本の里の文化を思い起させる。息せき切って階段を登りきると、古い社があり、その周辺には津島神社、秋葉神社や稲荷神社の小さな祠があった。社は鬱蒼とした新緑の樹々に囲われ、周囲の太い孟宗竹の林が印象的だ。

地域の豊穰と安全をもたらす天津神への信仰はいつまでも続くのだろうと思いつつ、眼下に多摩川の流れと府中の街を眺めながら石段をおりた。(奥野英城)

《編集後記にかえて》 最初に訪れた常楽寺にも、最後に訪ねた円照寺にも六地藏があった、本当によく見かけのお地藏さま達だ。3 でもなく 5 でもなく 6 というところに仏教的な深い意味があるのだろう。仏教における輪廻転生という生死観を表しているとのこと。人間は、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の 6 つの世界を輪廻しているのだそうだ。これを六道輪廻という。ぐるぐる回っていてはいつまでも抜け出せないではないか。そのうち目が回ってどうでもよくなってしまいうだろう。そこで初めてすべてを超越した涅槃に至るのかな。

苦しむ人に慈悲の心で救いをもたらすのがお地藏様の仕事だそう。苦しむ人、悲しむ人は無限に存在する。お地藏様の仕事も無限だなあ。(中井博子)